

西隣塾記

小山清

青空文庫

こないだ電車の中で新国劇の「大菩薩峠」上演の広告ビラを見かけた。中里介
 山居士追善興行としてあった。この芝居の上演も久し振りの気がする。介山居士は戦争
 中、生れ在所の西多摩郡の羽村で急逝された。あれは何年のことであつたろうか。救世
 軍の秋元巳太郎氏が葬儀委員長をされたという簡単な新聞記事を読んだ記憶がある。逝
 くなられた月日のことを私は覚えていない。また今年は何回忌に当るのか、それも知らな
 い。

私は嘗て介山居士の「千年檜の下にて」という随筆集を愛蔵していた。見返に居士の筆
 で「質直意柔軟」と書いてある。私の愛読書の一つであつたが、手許不如意の折に、鳴尾
 正太郎君がくれたフランシス・ド・サールの書簡集と一しよに、ほかの本とまとめて売り
 払ってしまった。私には介山居士という人はなんとなく忘れ難い人である。そうして居士
 のことを憶うときにはまたいつも鳴尾君のことを憶う。

最早十余年の昔になるが、私は一時、介山居士の経営になる羽村の西隣塾にいたことが
 ある。早春から秋ぐちにかけての半歳ほどの間であつた。私はすでに二十五歳にもなつて
 いて、最早親の臍を齧っているのも工合が悪くまた家庭の事情もいつまでも私を養うわけ

にはゆかなくなっていた。羽村にゆく前日本橋の本町にあった大菩薩峠刊行会の事務所で初めて会った時、介山居士は云いった。「瞑想したり、近隣の山野を散歩したりし給え。」

三月の下旬であつた。立川で青梅線おうめに乗り換えて羽村で下りた。生えはじめたばかりの麦畑や枝の芽吹いていない桑畑が見えて、まだ雪の消えずに残っている武甲の山脈やまなみが眼に迫ってくる感じだった。土地の人が「記念館」と呼んでいる西隣塾の文化瓦の赤い屋根が突き当りに見える、桑畑の間の一本道を歩いてゆくと、前方から自転車走ってきたが、私を見かけると飛び下りた。

「小山さんですか？」

「そうです。」

「中里先生から通知がありました。待っていました。右手に建物が見えますね。あれは印刷所ですが、あそこに皆さんいますから。」

それが鳴尾君だった。鳴尾君はそこまで買物にゆくがすぐ帰ると云って、また身軽に自転車に飛び乗った。十七八の少年に見えた。黒の、ボタンも黒のだぶだぶな詰襟服つめえりふくを着ていて、眼のクリクリした、熊の子のような可愛い顔つきをしている。私は振り返って走ってゆく自転車の後姿を見送った。鳴尾君の微笑がとてもよかったからである。「クオレ」

の中に出てくる少年のような印象を受けた。

印刷所の戸を開けると上^{あがり}端^{がまち}にストーブがあつて、二人の人がちようど一服しているところであつた。介山居士の甥^{おいぢ}御さんに当る村木さんと田中澄徹さんであつた。私は村木さんの顔を見てなんだか見覚えがあると思つた。すぐ思い当つた。聖徳太子に似ているのだ。国定教科書の挿絵にある太子像によく似ているのだ。あの肖像はばかに頸長に描いてあるが、村木さんの頸が丁度あんな工合であつた。村木さんもしまは子供さんの三四人はある家庭のいいパパに成り澄ましていることであろうから、私が頸長などと云つても、まさか縁起を担がれるようなことはあるまいと思う。私はまた田中さんの顔を見て、子供の時分家の違棚に飾つてあつた木彫の鬼の念仏を思い出した。

「すぐわかりましたか？」と村木さん。

私が頷^{うなず}いて、そこで鳴尾君に逢つたことを話すと、そのさい私が口にした若い人という言葉をきいて、

「若い人には違いないんですが、いくつだと思ひます？」

「さあ？　十七八じゃないんですか。」

「二十三ですよ。」

「若いなあ。」

そこへ鳴尾君が帰ってきた。鳴尾君はお茶請を買いに行つたのであつた。鳴尾君の買つてきた饅頭を食べながら、

「いま、小山さんがね、そこで鳴尾君という可愛い少年に逢つたつて話をしていたところだ。」と田中さん。

鳴尾君はまた子供のような微笑を見せて、

「小山さんはおいくつ？ 検査はすんだの？」

私も笑いながら、

「ええ、検査はすみました。二十五です。」

「それじゃあ、僕よりお兄さんですね。若いなあ。」

私達は顔を見合せて笑つた。私もふだん人から年少に見られる方ではあるが、鳴尾君の飛び抜けた若さには一驚^{いつきよう}を喫^{きつ}した。村木さんはまた私より二つ上の二十七であつたが、私達が幼いせいか、ぐつと老けて見えた。この西隣塾のいわば留守居役であり、また印刷所の主任であつた。田中さんはもう三十を越して子供もある人で、近くの多摩河畔にある小山の麓^{ふもと}に住んでいて、毎日自転車に乗つて塾へ通つてきているのであつた。

夕刻オート三輪車に乗って東京から介山居士が到着した。その頃介山居士は東京に十日羽村に七日という風に、居士の言葉を借用するならば、水陸両棲動物のような生活をしてきた。東京羽村間の往復には最初オート三輪車を使用していたが、まもなく当時流行しはじめたダットサンを購入された。運転手は大竹さんと云って私達と同年配の人で東京の居士の家に夫婦で住み込んでいた。村木さんは器用な人で小型の運転が出来るので、居士が羽村へやってくる、大竹さんが東京へ帰るまでの時間を、私達はあちこちダットサンを乗り廻したものである。介山居士は大竹さんのことを「重兵衛、重兵衛」と呼んでいた。けれど先代貞山の読物に出てくる大竹重兵衛を連想されての愛称である。私は大竹さんに頼んで、駅留になっている私の夜具布団を、三輪車に乗せてもらって塾まで運んだ。介山居士はうどんを食べようと云って、五十銭銀貨を鳴尾君に渡した。鳴尾君は自転車を走らせた。東京の相場しか知らない私は、五十銭でいくらうどんが食えるものかと思い、あるいは介山居士という人は吝嗇けちなのであるまいかとひそかに心配したりしたが、やがて鳴尾君が帰ってきて、さて食はじめてみて驚いた。一枚の五十銭銀貨は六人の大人がバンドをゆるめてかかっても食いきれないほどの大量のうどんに化けていて、鳴尾君と私は翌朝の食事でもそれで済ましたほどであった。

その頃西隣塾には五棟の建物があった。文化瓦の赤い大きなのが本館で、ここには「大菩薩峠」に関するいろんな記念品が飾ってあった。記念館の称のある所以である。本館に向って右手に印刷所。ここで介山居士の著書や機関誌「隣人之友」の活字を組んだ。輪転機がないので印刷は東京の印刷屋でやってもらった。本館の裏手に草葺くさぶきの家がある。この家は武州高尾山の妙音谷にあった居士の草庵そうあんをそっくりそのままこの地に移したもので、当時村木さんが住んでいた。耕書堂というのがあった。これは図書館で本館から渡り廊下が附いていた。その奥に居士が羽村に来た時に寝起する瓦葺の小庵があった。居士は羽村へ来るとこの小庵で自炊の生活をした。自分で畑ねぎの葱など抜いてきて汁をつくったりしていた。私達は居士は居士、村木さんは村木さん、そうして鳴尾君と私という風にめいめい勝手にやっていた。鳴尾君と私は始は二人かわりばんこに飯を焚たいたが、そのうち私は横著を極め込んで、いつのまにか鳴尾君ひとり女房役に廻るようになった。鳴尾君は前年の十一月の末にここへ来たので、私より三月先輩というわけであった。

鳴尾君と私は本館の三階と云うと体裁はいいが、実は屋根裏に寝た。「ひどいところです。よ。」と鳴尾君は幾分気づかわしげに私の顔色を窺うかがったが、私がさらに辟易した様子を見せぬので安心したようだった。私は衣食住には無関心な方なので、野蛮な生活様式はむし

ろ望むところである。私は細長い屋根裏のまんなかへんに柔道用の畳を三畳がとこ敷いて、そこを塹ねぐらにした。鳴尾君はまた窓際に陣取っていた。「寒くないですか？」と訊いたら、「星が見えるから。」と風流なことを云った。窓の外を風こがらしが吹く音をききながら寝ていると、自分が非常な高処たかみに巣をつくっているような気がしてきて妙だそうである。また樹上に坐禅を組んだという梅尾とがのおの明恵上人みょうえしやうにんのことが偲しのばれるという。私はまた当時流行していたジャングル映画に出てきたなんとか族の土人が樹上に住居を営んでいたことを思い出したりした。私はこれから始まる自分の生活のことよりも、鳴尾君のような人がよくも鼠にも曳かれずにこんなところに独り暮してこられたものだと思った。

話し合ってみると鳴尾君と私にはふしぎな縁故があった。私は十八の年に故高倉徳太郎先生から洗礼を受けた。当時の私にとってはキリストきよう基督教イコール高倉であった。それほどに私は一時先生に傾倒した。が、二十の年にはもう教会から離籍して浪人してしまった。私はズボンのポケットに無造作に突込んであった金を散歩の途上で落してしまったように、いつのまにか信仰を失くしてしまっていた。鳴尾君もまた二十の年に高倉先生から洗礼を受けた。そうしてその頃は高倉先生が校長をしていた東京神学社の学生であった。大竹重兵衛氏の説によれば失恋に由来する神経衰弱で一時休学しているのだということであった

が、しかし失恋のことは措いて、鳴尾君のわだかまりのない微笑は、神経衰弱なんかとは縁のないものに見えた。「いいえ、わがままなんです。」と鳴尾君は言葉少に云うだけだった。高倉先生を尋ねると、いまは郷里の綾部で病を養つて居られるということだった。そうしてこの方はほんとの神経衰弱らしかった。鳴尾君は高倉先生のことか心にかかる風で「掛替のない人だから。」と云った。私はそういう鳴尾君にいきなり心が寄せられた。

私達はすぐに隔へだてのない仲になった。鳴尾君は私のことを「案山居士」などと云った。山田の中の一本足の案山かかし子のことである。勿論鳴尾君は口から出まかせを云ったのでなんの意味もないのだが、しかし私はそんなものに似ているわけはなかった。彼は頓馬とんまで、哀れで、笑止千万な奴ではあるが、それでも少くとも雀すずめおど威しの用には立つ。私には自分がないによらず物の役に立とうなどとは思えなかった。私は自分を一本の焼木やけぼつく杵きだと思つていた。誰だか知らないが白い衣を著たへんな人が丑うしの刻参りをして、私に象かたどつた人形ひとがたに呪いと共に瞋恚しんいの釘を打ち込んでいるのではあるまいかという妄想に襲われたりした。私にはしばらく前から睡眠中にギリギリ齒はぎしり軋をを嚙むいやな癖がついてしまっていた。私こそ神経衰弱かも知れなかった。私は鳴尾君のことを「贗牧師」と呼んだりした。鳴尾君

は黒の色が好きらしかった。小柄な軀からだにいつも黒のだぶだぶな服を着ていたが、そのだぶだぶなところがまた気に入っているらしかった。「僕は窮屈なのは嫌いなんです。」と云っていた。鳴尾君の外套がいとうというのがまたひどく特徴のあるものであった。やはり黒い色の、丈は恐ろしく短いが、身幅はまた恐ろしくたつぷりしている、外套というよりもマントに近い感じのものであった。そのうえ帽子がまたふるっていた。ウェイクフィールドかステパンチコヴオの村長さんでも被りそうな黒の小型の山高帽子というよりは、お腕シャツへりに短い縁へりをくつつけたようなへんてこな代物であった。穿はく靴がまたよかった。ボタンで止めるのでもなければ、紐で括くくるのでもない、ゴムの帯が附ついていて、すぽっと足の入るやつ、あれであつた。頭の天辺から足の爪先まで黒一色、宛然牧師の卵の如きものが出来上つたが、それが決して滑稽でなかつた。偶然に寄せ集められたのではなくそこに鳴尾君の好尚がはたらいていたからではあるうが、なにか人柄にぴたり嵌はまつていて一分の隙もなかつた。詩人の身み嗜みだしなみと云つたようなものさえ感じられた。私は鳴尾君におしゃれの天稟てんぴんのあるのを察知した。恐らく年頃の娘さんはこういう可愛い牧師さんから祝福を授けてもらいたくなるのではなからうか。鳴尾君はときたまそんな扮装でいそいそと青梅の町などに出かけたりしていた。私はそういう鳴尾君を「贗牧師」と呼んだ。鳴尾君はい

つも持前の柔和な微笑で応じた。鳴尾君の意識に厭味いやみな文学趣味など毛ほどもなかったことは云うまでもない。私はまた鳴尾君のことを時に「讚美歌牧師」と云ったりした。鳴尾君の声は純粹のバスだった。印刷所で文選をしながら詩吟をしたり讚美歌をうたうことがあったが、そういう時私達は思わずき惚れた。そういう人を惑わす技倆ぎりょうを持っているからにはいよいよ贗牧師の資格があると云ったら、鳴尾君は真面目に「ええ、神学社の寄宿舎では僕が一番讚美歌が巧いんです。」と答えた。恐らく鳴尾君の讚美歌は天上のエホバの御座みくらにまでとどいたことであろう。私は時に鳴尾君の祈祷きとうの姿を瞥見べっけんすることがあった。鳴尾君は私達の眼につかぬようにつとめて気をつけていたようではあるが、そういう時私は自分が大事なものを失くしてしまったような気持になった。隠れたるに見給う神に祈を捧げている鳴尾君の姿には、使徒トマスとかアンデレとかを彷彿ほうふつさせるものがある。私はひどく心をそられたのである。バンカラな不良学生がお行儀のいい優等生にふと感ずる郷愁のようなものかも知れなかった。

私達塾生の日課は主として印刷所で介山居士の著書や雑誌「隣人之友」を組むことであつた。輪転機がないため印刷することが出来ないのです、植字したやつをその都度大竹さんが東京羽村間を往復して印刷屋へ運搬した。植字は専ら村木さんがこれに当り、鳴尾君と

私の二人が文選を受け持ち、田中さんは近眼だったので主に解版の仕事をやってもらった。私は日ならずして文選の仕事に熟達した。旬日を出ずして一日に九ポで八箱は拾えるようになった。自分でも意外であつたがはたの人も驚いた。この仕事はあるいは自分の性に適するかも知れないと思つたが、しかし私の能率はそれ以上は決して上らなかつた。一月立つても二月立つても同じであつた。私の遣^{やりくち}口にはどこもなくもたもたした覺^{おぼつか}束ないところがあつて、鳴尾君と比較すると、どうしても正確さや敏速さに欠けていた。二人で何度か競争もやつたが、いつも負けた。自分のやることはいつもこれだ、決して番狂わせはないんだ、自分はやつぱり駄目な奴だ、焼^{やけぼく}木杙^{くい}だと思つた。

「僕は駄目なんだ。わかつているんだ。」

「そんなことはない。」

「誰かが丑の刻参りをして僕を呪っているんだ。」

鳴尾君は嘖きだして、

「まさか、そんな、机竜之助ではあるまいし。小山さんのようない人を呪う人なんかいるのですか。」

「そうかしら、僕はいいい人かね。僕は買物をしても嘗て一度も有難うって礼を云われた験

がないんだ。僻^{ひが}まざるを得ないね。」

鳴尾君はまた笑つて、

「それはひどいな。ほんとですか。しかしそういう受難は聖者の生涯には付きものですね。人に賤^{しりぞ}められ擯^{しりぞ}けられてこそ聖者でしょ。まあ癩^{らいびよう}病人^{びやうじん}みたいなものだな。誰もその毫^{ごう}光^{こう}には気がつかない。」

「なんだ。そんな子供みたいな顔をしていて、それでもお世辞の一つ位は云えるんだね。贗^{ごう}牧師の本性紛れもないな。」

「いいえ、僕はほんとうにそう思っているんです。小山さんは生涯の終にはきつとこういう風になりますよ。」

鳴尾君は眼をクリクリさせながら、指で頭の後に円を描いて見せた。

日曜日が来る毎に私達は印刷屋から日曜学校の先生に早変りした。本館の二階の大広間を開放して教場に使った。生徒は村の子供達だった。たいして面白いものでもなかったのだが、それでも大勢やつて来た。介山居士は子供達のために毎週短い感話を書いた。私達はそれをカードに印刷して子供達に配った。多くそのときの季節や月日に因^{ちな}んだ話であった。彼岸^{ひがん}のことや屈原^{くつげん}についての小話があつたのを覚えてゐる。私を除いた三人の先生

が話をした。私にはとても有象無象を前に控えて話など出来なかった。カードの文章を読んでそれを子供達に読ませるのがやつとだった。私はいまはそれほどでもないが、昔はひどいにかみやでなにかと云えばすぐ処女の如くはに candide でしまったものだ。たまには介山居士が話をすることがあった。居士は子供達に多摩の河原からめいめいの好みの石を拾ってこさせてその品評をしたりした。居士は掌に一つ一つ石をのせて、この石は大へん奇抜な形をしていて面白いようではあるが、こういうものはすぐ飽きてしまつて長くは私達の心を惹かない、この石は見た目は平凡でつまらないものようではあるが、よく見るとこの素直な形には汲めども尽きない味わいがある。そんな風に話した。鳴尾君は話が巧かった。多く聖書の話をした。ノアの方舟はこぶねの話、イエスの誕生の日の厩小屋うまやの話、エマオの途上の話など記憶に残っている。ノアの方舟の話は傑作だった。鳴尾君は大混雑の舟に乗り合せているいろんな動物の心理描写をやつてのけたのだが、そのユウモラスな話し振りに子供達は大喜びであつた。私は鳴尾君に文学の才能があると思つた。

「童話を書いてみたら。」

と云つたが、鳴尾君は否定して、

「僕は子供が好きなんです。くにへ歸つて小学校の先生になろうかとも思っているんです。」

教会の日曜学校にも出たことがあるけれど、ここの子供の方がいいですね。野育ちの方がいい。都会の子供はなんて云うか子供の癖に文化的な厭味みたいなものがあって。この子供は暮しは貧しいようだけれど、皆んなのびのびしていますね。話をきいていると面白いですよ。明るい機智に富んでいて。生活の智慧と云ったようなものさえ芽生えていますね。前にこの屋根裏へ上ってきて僕の寢床を見つけて、なんて云うかと思ったら、なんだ雀の巣かと思ったら人間の巣でやがんのだつて。面白いことを云うでしょ。」

そういう鳴尾君は子供達から慕われていた。鳴尾君の机のまわりは子供達からおくられた図画や習字が一ぱい飾ってあった。

「あんまり殺風景だから子供の絵でも貼りつけてやろうと思って無心をしたら、こんなに沢山持ってきてくれたんです。子供なんて自分の持っているものを一ぺんに出してしまわないと気がすまないんですかね。」

「僕がそうなんだ。」

「ええ、実は僕もそうなんだ。」

二人は顔を見合せて笑った。なんと云つても私達は二人共に年が若かったのである。子供達に心を惹かれていることが、鳴尾君の滞在を長引かせている原因の一つであることは

間違いなかった。

私はこの屋根裏部屋で「こうのとり鶴物語」という習作を書いた。鶴が揺籃ゆりかごへ置いていった子供、若い日のアンデルセンのことを書いた。鳴尾君に読んでもらった。「僕は好きだな。涙が出そうになったところが一箇所あった。」と鳴尾君は云ってくれた。

鳴尾君はまた介山居士が子供達のために書いた文章をカードに印刷する際にハガキに印刷して（丁度カードの大きさがハガキ大だったので）その都度くのに弟妹達へ送っていた。鳴尾君の郷里は紀州のなんとか郡の富貴村というところ。家は代々百姓をしていた。大家族らしく、そうして鳴尾君は長男で、弟妹達はまだ幼いらしかった。鳴尾君は私にもそうすることを勧めたが、私にはそんなハガキを送る宛はなかった。その時だったか、それからどんなことを云ったのか、それは忘れてしまったが、私が自分の家庭について云ったことをきき咎めて、鳴尾君が「エゴイストだなあ。」と嘆息を漏らしたことがある。私は鳴尾君の「神経衰弱」と云うより頭痛の種は家庭的なことかも知れないと思った。云うまでもなく鳴尾君の家の宗旨は基督教ではなかった。高倉先生が病氣なのが鳴尾君には痛手らしかった。それでも鳴尾君は毎日日課のようにして英訳本で「基督教原理」を読み進めていた。その頃はいまのように宗教書の氾濫はんらんを見ず、「基督教原理」の完訳もまだ出版さ

れていなかったのである。

印刷所の仕事が変わりに忙しくて、介山居士の云ったように、そんなに近隣の山野を散歩も出来なかったが、それでも日曜の午後などには鳴尾君に案内してもらってあちこち歩いた。私は木や草の名など皆目知らなかった。桑畑も実はわからなかった。あの木の根っこみたいのの一体なんだろうと思つたものだ。鳴尾君はそんな私にいろいろ知識を授けてくれた。げんのしょうこが植物で薬草だということを知つたのも鳴尾君のたまものである。

私はそれまで※げんのしょうこ牛さんしょうお児は山椒魚の一種のようなものだと思ひ込んでいたのだ。鳴

尾君はこんな風に私に野外教授を施してくれた。「これは道のべの木むくげは馬に喰われけり
の木むくげです。」とか、「これは遍く菜しゆゆ莢を挿んでの菜莢です。」とか。鳴尾君は王維おういの望
郷の詩をよく吟じていたものだ。私は月見草さえ知らなかった。

「中里先生は月見草が好きなようですね。おそらく余の愛するに適した花かも知れない、
なんて随筆に書いていますね。」

そうして鳴尾君は云つた。

「小山さんは中里先生をどう思います？」

「やさしい人だと思う。」

「僕もそう思います。」

一日「大澄山」の麓にある田中さんの家庭を訪問した。この辺は多摩川の流に沿ってひとつらなりの丘陵が起伏していて、田中さんは自家の裏山に当る一つを仮りに名づけて大澄山と呼んでいたのである。こんもりとした恰好のいい小山で、この山を見た人には、田中さんの命名はなんとなく思いつきな気がされるのである。「私は大澄山の麓に居住いたします田中澄徹と申す者でございます。」など「大菩薩峠」の弁信法師もどきに、食後の腹ごなしにはよくやっていた。いつか、大澄山という名称と澄徹という雅号とは、どちらが先に生れたのかときき糺^{ただ}したところ、田中さんは頭をなでなで、「それは君、鶏がさきか卵がさきかというようなものだよ。」とぬからぬ笑を見せた。私はさきに田中さんのことを鬼の念仏に似ているように云ったけれど、なにも田中さんはあんな恐い顔もまた苦虫を噛み潰したような顔もしているわけではない。なんとなく感じに似ているところがあるのだ。また鬼の念仏とか鬼瓦とかいうやつはよく見ると、恐くもなんともない。かれらには人間に見かけるような悪相がない。つまり邪慳^{じゃけん}でも陰険でもないのだ。むしろ人間を恐怖するのあまりあんな顔つきになってしまったような形跡さえ見える。かれらの鬼面はあるいは正当防衛の結果なのかも知れない。口からはみ出している牙は敵に挑むためのも

のではなく守るためのものである。田中さんは愛想のいい気のおかげない腰の低い人である。少しく多弁でそうして親切である。人と話しながら時々頭に手をやってなでさするような手つきをする。そういう時田中さんは相手の気を兼ねて口をきいているのだ。田中さんの家庭はお母さんに奥さんにそうして子供さんは二つ位の男の子が確か一人だったと覚えている。田中さんが毎日塾へ出かけている留守を、お母さんと奥さんは畑仕事をしているのだ。そういう暮しである。田中さんは生れつき鋤すき鋤くわ作業は嫌いらしく、はたち前後から家を飛び出して、東京でいろんな職業に就いたり、宗教団体に加盟したり、社会改良派の仲間入りをしたりして、自分の好きなことをやってきたらしい。そういう「浮草」のタイプなのだ。狭山茶の行商をして苦学していた頃の思い出を書いて「隣人之友」に載せたこともある。田中さんのような人はどんな田舎にも一人や二人は見かけけるのではあるまいか。田中さんはこまめであつた。人の厭いやがるようなことも気軽に引き受けた。いつも進んで貧び乏ぼくじ籤しんを引き当てようとする人間が塾には二人いたのである。田中さんと鳴尾君である。それをいいことにして村木さんと私はいつも横著を極め込んでいた。だから田中さんはちよこちよこしているように見えることもあつた。けれども決してそんな人ではなかった。私は田中さんを見てやはり素朴な田舎人だと思つた。都会で猫の額ほどの地歩を争つてい

る者の持つずるさもひつつこさもない。まして田中さんは挑むにも守るにも牙などは持ち合せていなかった。私のような世間見ずのあまのじやく天邪鬼に対しても終始寛容を以て臨んでくれた。そういう田中さんにはいわば人生の端役を以て任じている者の雅懷がかいがあつた。私がその第一印象に鬼の念仏を聯想れんそうしたというのも、つまりその雅懷から生ずる田中さんの持つ微笑ユウモアが然らしめたのではあるまいか。思うに子供の虫封むしふうじなどのまじないに利用されるかの鬼の念仏像はむしろユウモラスな存在ではなからうか。その日鳴尾君と私は田中さんの東京放浪時代の形見とでも云うべき署名帳を見せてもらつたが、それには実に各界名士の署名が綺羅星きらぼしの如く並んでいて、よくもかく万遍なく天路歷程てんろれきていが出来たものだ。二人とも魂消たまげてしまった。サンプルをお目にかければ、床次竹二郎とこなみたけじろう、菊池寛きくちかん、与謝野晶子あきこ、山室軍平やまむろぐんぺい、賀川豊彦かがわとよひこ、喜多村緑郎きたむらろくろう、中村吉右衛門なかむらきちえもん、堺利彦さかいとしひこ、丸山鶴吉きち、ざつとこんな工合である。中には寸言や俳句さえ書き添えてあるのがあつた。田中さんは私達の驚いているのを満足そうに見て、「皆んない人だつた。気軽にすぐ書いてくれた。」と云つた。奥さんがつくつてくれた菜を炊き込んだ粥かゆを御馳走になつた。塾へ帰る途で、

「羽村つて貧乏村だね。なんにもないね。いいね。」

と云つたら、それで鳴尾君には通じたようで、

「ええ。土地の氣風も悪くないし。どう？ 落著けそうですか。」

私はそれには答えずに、

「僕は夢をみてもみんな東京のことばかりだ。ここの生活はまだ夢の中に入つてこない。」
鳴尾君はふと思いついたように、

「高尾山にいた頃の中里先生の生活はよかつたようだな。御自分でもそう云つていますね。
『千年檜の下にて』という本があるでしょ。読みましたか？ あんな生活はたのしいだらうな。」

羽村は小さい貧しい村である。家も粗末な家ばかりだ。それでも養蚕期ようさんきには少し実入があるらしい。初めて羽村の駅に下りて、畑の中に桑の根っこを見、まだ雪の消えずに残っている山脈を見た時には殺風景にも思つた。また土地の人の口の悪いのに、喧嘩腰で話しているようなのには驚いた。氣性の荒いところかとも思つたが、そうではなかった。暮してみても私の心に触れてきた貧しさには柔かさがあつた。私は思つた。貧しい人の心には決して貧を卑しむ氣持がないということ。その頃介山居士が「隣人之友」に書いた詩の一節に「平なる野と空とを見つ」というのがあつたが、羽村はただそれだけの奇もない平

凡な貧乏村である。しかし平なる野と空と、そうして多摩の流があり、好い青葉期を持つ村の貧しさは平明なものだ。それは人の心を荒くしたり鋭くしたりするようなものではない。子供が明るくのびのびしていて、土地の気風に貧を卑しむところのないのは自然だと思う。東京をわずかしき離れていないのに、すでに言葉も鄙^{ひな}びていて、その土地の気風を存しているのが、私にはゆかしい気がした。

ある日、介山居士が名づけて「お銀様の桜」と呼んだ桜樹の下に縁台を持ち出して皆んなでお茶を呑んでいた時、「大菩薩峠」の朗読会をめいめい役をきめてやってみようという話が出た。村木さんは自ら竜之助の役を買って出た。田中さんの弁信法師は自他共に許すところ。鳴尾君はさしずめ清澄の茂太郎。さて私だが、その時介山居士がふと云った。

「小山君は与八がいいだろう。」

あの種も仕掛もない善玉の役を私に振ってくれたのである。なるほど私は思ったが、「僕はピグミーになりたい。」

居士はさりげない表情で、

「そう先っ走りをしてはいけない。」

「大菩薩峠」の読者は知っているわけだが、あの大長篇の中巻あたりに、ピグミーと呼ぶ

一種の下等動物が出てくる。こいつはまことに下等なやつで、勿論人並にお袋の腹から生れ出るというわけにはまいらなかった。天井の節穴などから過って世の中に顔を出した哀れな代物である。眼もなければ口もないのに、胃袋は自尊と虚栄でパンクせんばかりに脹れてゐる。こいつが時々思い出したように竜之助を挑みにくる。竜之助がとりあわないうる、いつまでもへばりついていて、さかんに神経戦術を用いる。流石さすがに煩くなつてきて、抜く手も見せず一刀両断にするのだが、そこが下等動物の哀れさと云うか、浅間しさと云うか、自分が真二つにされたという自覚症状がない。壁なんかにとりついてヒクヒクやつてゐるうちに、安直なことには、どうやら息を吹返す。そこで安直先生、わが鉾脈の底知れぬことよと自分で自分に感服して、またぞろ竜之助のお髭ひげの塵をはらいにくる。まことに煩うるさいやつ。ピグミーとはかかる下等動物である。私だとしてこんなやつにはなりたくない。それでは折角いい役を振ってくれたのになぜあんなことを云つたのか。天邪鬼からでも悪戯気からでもない。私はそういうことは大嫌いなのだ。ただ雑音である。出来の悪いラジオではないが、私は時々こんな雑音を発する。「ピグミーになりたい。」という言葉の背後には私という人間は全然ないのだ。またこんなこともあった。あるとき東京からお客様が来て、介山居士は本館の中を案内して廻って記念品を見せていた。私も傍かたわらにい

た。記念品の中に石井鶴三^{いしいつるぞう}氏の画があつた。狼を連れて走っている清澄の茂太郎を描いたものである。いい画だった。私はその時その画をやたら褒めちぎった。介山居士と石井氏の間に大喧嘩のあつたことは世間周知のことである。まだそのほとぼりの醒めていない時であつた。東京のお客は私の誇張した賞讃の言葉に眉^{まゆ}を顰^{しか}めた。しかし介山居士は笑いながら「よく描けている。」と一言云つただけだった。このことも私の性に反する。やはり雑音のたぐいである。

耕書堂からなにやら古ぼけた本を抱えて出てきた介山居士が、渡り廊下を本館の方へ歩いて来ながら私を見かけて、「小山君、一寸^{ちよつと}きてくれ。」と呼んだ。私は印刷所へゆくところだったが、居士に附いて本館の一室に入った。居士はそこにある大机に向つて腰をかけ、私にもその脇に腰をかけさせた。口述筆記なのであつた。その頃居士は「隣人之友」に「日本武術神妙記」の続篇を連載していたが、その口述筆記であつた。居士は懷から眼鏡のケースを取出して眼鏡をかけ、本を開いてゆっくり口述された。源頼政の鶴退治^{ねえくんだり}の件であつた。居士の顔は眼鏡をかけるとやさしくなる。また居士は太鼓腹で恰幅のいい人で、みかけは土方の親方のようにであつたが、声はやさしかった。少年時代には電話の交換手を勤めたことがある位で、きれいな声をしていた。ふだんはそれほどにも思わなかったが、

口述などする時にはそれがわかった。私は胸をどきどきさせながら筆記した。居士は私のべつインキ壺にペン尖を漬けるのに気づいて、

「どれ、見せてごらん。」

と私が差し出した原稿用紙をのぞいて、

「あまり力を入れて書くから、すぐインキがきれてしまうんだ。」

と云った。私は自分のやたらインキを滲^{にじ}ませている金釘流が恥ずかしくてならなかった。居士は自分でペンを執^とつてさらさら書き流した。

「ほら、こういう風に軽くペンを走らせればいいんだよ。」

小学生の時習字の時間などに、たまたま先生から手を取ってもらって教を受けることがある。先生の掌は大きくて暖くて、小さい生徒の胸は嬉しさと恥ずかしさで一ぱいになる。私はその時それに似た気持になった。居士からペンを渡されてまた筆記を続けたが、いくらか気をつけても私のペンは軽く走らず、私の書く字はたつぷりインキを滲ませて、私は相変らずせわしくインキ壺にペン尖を突込まねばならなかった。

「今日はここまでにしておこう。」

と云って、居士は私の筆記に眼を通し、誤字を訂正し脱字を書き入れたりした。居士は

「御苦労さん。」と云った。もう用はないのである。私はもじもじしていたが、云った。

「先生は千年櫨の下にいた時には楽しかったですか？」

居士は眼もとにうすく笑を見せて頷いただけだった。なんだかばつが悪かった。私はまた云った。

「自分の若さというものが纏まとつて胸に浮んでくるような期が来るでしょうか？」

居士は私の顔から眼をそらしたが、誰にも心のらくになるような期が一度は来るようだというような意味のことを云った。それから居士はふと思いついたように立ち上つて、そこに陳列してある本の中から一冊抜き出して、また机に向い、ペンを執つて一寸躊躇ちゆうちよしてから見返に「質直意柔軟」と書いて、その「千年櫨の下にて」を私にくれた。私が本をあけて挿入してある千年櫨の写真や居士の草庵の写真に飽かず見入っていると、居士は立ち上つた。渡り廊下を耕書堂の方へゆく居士の後姿に私は呼びかけた。

「先生。」

居士は立ち止つて横顔を向けた。

「青年はどういう本を読んだらいいでしょうか？」

「聖書。論語。」

居士はそう云捨てて廊下を歩いていった。

私は介山居士が千年檜の下に草庵を結んでいて、傳く^{かしず}一人の弟子が私であつたなら、どんなにいいだろうと思つた。私は薪を拾ひ、水を汲み、畑を耕すだろう。私は「ピグミーになりたい。」など勿論云わないだろう。また青年はどんな本を読んだらいいかなど問いかけてもしないだろう。居士の傍にいただけで、その声をきいているだけで、私の心は満たされるだろう。時に居士が私を呼んで論語を繙^{ひもと}き教えてくれるならば、私はどんなに嬉しいことだろう。居士の一言一句に私は耳を傾けるだろう。そうして私の心はいつもあるべきところにあるだろう。

夏のことであつた。私が屋根裏部屋で昼寝をしていると、階下から「案山居士、いるかい？」と呼ぶ鳴尾君の声がした。鳴尾君が私のことをそんな風に呼ぶのは、いつもなにかある時に限る。下りていつて見ると、鳴尾君はいやにそわそわしている。

「ばかに興奮しているじゃないか？」

と云うと、

「宋淵^{そうえん}坊が来たんだ。」

と眼を輝かせている。中川宋淵さんは介山居士の友達で、その頃「隣人之友」に毎号俳

句を寄稿していた。時には行脚先から音信が舞い込んだりして、私はその稀まれな古調を愛読していたものだ。

「どんな人だ。」

「ま、会ってごらんさない。」

私は鳴尾君の顔を見て、この輝きが宋淵坊の照返しだとしたら、これは相当なものだと思つた。この日私は宋淵さんをつかまえて、坐禅のやり方を教えてもらったが、私はこの青年僧に完全に圧倒された。たくしあげた僧衣の裾からはみ出している、日焼した逞たくましい臍すねを見ただけで、眼の眩くらむ思いがした。その日焼けが並大抵の日焼けではないのだ。赤しゃく銅どう色なんてところを通り越していた。行脚あんぎやというものが生易しいものでないことを雄弁に物語っていた。私の坐禅が三日坊主に終ったことは、これは云うまでもない。ずっと後になって、三好達治氏が著した「諷詠ふうえい十二月」という本に、宋淵さんの、たらちねの生れぬ前きの月明り、という句が扱ばれてあるのを見た。

九月に入つて間もなく私は西隣塾を辞した。「田舎はこれからいいんですよ。もつとゆつくりしてゆきなさい。」と村木さんは云つた。田中さんは私が東京へ帰るのを頻しきりに止めた。私は使いあましたインキ、ペン、ノートの類たぐいが荷物になるので、田中さんに上げ

たが、田中さんは「これは預っておきます。その気になったら、いつでも帰っていらつしやい。」と云つて、どうしても告別の言葉を云わなかった。鳴尾君は「僕もそのうち寄宿舎に帰ります。」と云つた。介山居士は「また遊びに来給え。」と云つた。

東京へ帰ると私はすぐにあくせくしはじめた。それは始からわかつていることだった。私が蓄音器商組合の調査部員などという怪しげな職業に就いていた時、突然鳴尾君から電報が来た。新宿駅へ直ぐ来いというのであつた。私は自動車で駆けつけた。鳴尾君はれいの贗牧師の扮装で風呂敷包を下げて駅の前に立っていた。私達は近くの喫茶店に入った。鳴尾君が私に風呂敷包を渡して、これから柏木の学友の許にゆかなくてはならない、……そう、ゆくとは云わなかった、なにか用事があるらしく、ゆかなくてはならないと云つた時、お巡りさんが入ってきていきなり私達に一寸交番へ来いと云つた。なんですかと云うと、なんでもいいから来いと云つた。私達は駅前交番に連れ込まれた。お巡りさんは私達の顔を等分に見て、「君達は何をしていたんだ？」と訊問した。なにもしていない、お茶を呑んで久闊きゆうかつを叙じよしていたところだったと答えると、その風呂敷包を拵しらげてみると云つた。私はこの時はじめてハハアと合点が入った。このお巡りさんは私が自動車で駆けつけた時から見ていて、それで私達のことをなにか街頭連絡のたぐいに見過つたのに違ひ

ないと思った。まったくそうらしかった。風呂敷包の中身は私が塾を辞する時鳴尾君に預けていった本である。千年檜の下にて、フランシス・ド・サール書簡集、秋元巳太郎氏の伝道日記、和讃集等々である。サール司教がシャンタル夫人に与えた書簡集は鳴尾君が私に饒別にくれたものである。塾にいる時私が一寸のぞいてみて、チェホフに似ているなどひどいインチキを云った本である。お巡りさんは一冊一冊手に取って見ていたが、どれもが赤い本でも黒い本でもなく、むしろ抹香臭いものであるのに怪訝な面持になった。やがて自分の思い違いに気づいたけしきで、もう帰ってよろしいと云った。私達は今更お茶を呑みなおす気にもなれず、交番の前で左右に別れた。

次にそうして最後に私が鳴尾君を見たのは、高倉先生が逝^なくなって、その葬儀が信濃町教会で執行された時であった。葬儀委員長は田川大吉郎^{たがわだいきちろう}氏であったか、それとも斎藤^{さいとう}勇^{たけし}氏であったか、私の記憶はあやふやである。高倉先生の柩^{ひつぎ}を担うお弟子さん達の中に鳴尾君はいた。私はふいに鳴尾君が顔を顰^{しか}めるのを見た。大勢で担っているのに柩が重いわけではない。むしろ先生の遺骸は軽ろきに失したのであろう。そうしてこのことが鳴尾君の顔を顰めさせたのであろう。その日私は鳴尾君と遠くから目礼し合っただけで言葉は交さなかった。

その後私の生活は急速にひどくなった。住処も転々と移り変った。

「その気になったらすぐ帰っていらつしやい。」そう云った田中さんの声音を私は何度も思い起した。私もまた「浮草」の生れつきであつた。そういう中で私は鳴尾君が松江教会の副牧師になつて赴任したことを風の便りに聞いた。しばらくして私はまた鳴尾君が病を得て郷里の富貴村で急逝したことを耳にした。介山居士が鳴尾君の夭折をいたく惜しまれたという話も伝え聞いた。

私は西隣塾を辞して間もなく鳴尾君から手紙をもらったが、その中にこんなことが書いてあつたのを覚えている。断るまでもなく原文の通りではない。

「三家三勇士の一人は紀伊の某という若侍だ。三十三間堂で通し矢を試みて、始はうまく射ぬいたが、そのうち放つ矢がみんな的を外ずれるようになった。絶望して腕を拱くこまね折、始終を物陰で見届けていた、これも三勇士の一人である尾張の某という侍が出てきて、小柄で腕の鬱血うっけつをとりぞいてくれる。そこでまた試みると、こんどは百発百中であつたという。この話は今日耕書堂で『日本武術神妙記』の口述筆記をした時に、君の話が出て、そのさい中里先生が話してくれたのだ。僕はこの話を聞いて君が自分のことをいつも焼木杣だと云つていたことを思い出した。中里先生は君が塾を去られたことを遺憾に思つ

ていられるようだ。耕書堂には君も知っているように、中里先生が虎の画を描いた衝立がある。先生はその衝立を背後にして口述された。僕はなんとなく四睡図しすいずを思い浮べた。確か浅草寺にあるやつだ。虎に倚懸よりかかってみんな昼寝しているのだ。豊干ぶかんはもとより先生である。僕は寒山かんざんだか拾得じつとくだか、それは知らないが、一人の欠けていることが物足りない気がした。」

師友に先立たれて独りあとにとり残されるのは、所在ない気の抜けた気持のものである。

青空文庫情報

底本：「落穂拾い・犬の生活」ちくま文庫、筑摩書房

2013（平成25）年3月10日第1刷発行

底本の親本：「小山清全集」筑摩書房

1999（平成11）年11月10日発行

初出：「文学界 第三卷第九号」文藝春秋

1949（昭和24）年11月1日発行

入力：kompass

校正：酒井裕二

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西隣塾記

小山清

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>